風俗文選

箴銘 誄 六

へ 5
5700
6

藏

早稲田大学図書
勝俣氏旧蔵書
門 へ6
號 5693
卷 2
い57280

飲食色欲箴　許六

聽箴　許六

風俗文選巻之六

○箴類

飲食色欲箴　許六

五老井　許六選

善ハ常也。悪ハ變なり。悪出て後善あり。酒ハ菓悪
ハ迷ハぬ人なれども善悪よりうけまね人なり。食ハ乱れやすき
まゝ色ハ民と共にせよとや。さ耗ども今日乃命を守るなれ
色乃あハ神を志まする功も。まづじんよりわ。やがて大病を
出せり。色ハ三哉ともたふくむす甚しおびへよ。甚割
せし神ども。扣翁斉ハ道乃おしへの高き事ハ。恋を貴ぶ一
とまで。色ハ風雅也。風雅ハ仁なり。惻隠乃心あれ。大なる篇六

二女を嫁しけれども。今日に於して足る所あり。是舜帝也
なり。かの舜たる親を殺やうとはかりしとなれども
なほ。天子の高き兄弟姉妹と嫁あるをせしは。人
倫の姉妹と嫁あるを道とやはらかむ。彼舜は
そばぞう来を不孝の第一とするとて。孝を人倫の始と
せる事り。若周公。孔子。天性精乃人をもつて
子あるを第一の孝道を欠ぬべし。是とても聖人の
まれられとはいへども。桀紂が様悪も子ある孫は是孝
子なれば。子ある人をあはれみ給ふべし。
君臣の道は。所の城乃数をも廣め。是数は
孫となれを第一とせり。これ親を孝行する者世に多し。

大概をとり人もすぐ三世の孫也。神の道に合しまた
これをあぶ部とよく枝葉末実の機をよくうるり
小量乃分量をよくさとせて。此乃せまく人の色を
固也。彼やうの人く。ほうれを不孝とし。鼠乃子供
遊樹するば。我なく留まらもこばちんう孫。猶も嫁
康熙をわわく法は及ぶむ當家に合組をもちて
これば法度に出を重きとし。ともかも貴を
世まそうじまして他の所へうもの孫を多乃春属乃合ひ
てぶしゆらんよわハ心を先でうし。佛法をさける物ハ。備へ
さるぞうりまで節で庭らば是旧乃本建立の深から
ひっぽかやきの孫がしそ後をそて。子孫あるせしとなふなる

とあらひて。一人の罪人となりの所心てありわざとなれ
未みあ紙なり。汁須ハ僧のかわりてとやるみれあ紙ば
かや一もじ侍る。
「温飩ハ汁をほめる紙。蕎麦切ハからミよ盛をよろ紙ぞ
奈良茶ハ汲一盃を菜まつまいる紙ども。あら号たい
持ちて。飯台菜据たまふ。すぐれたる様宗の姫ハ實きの乃
みえなしとせるぶ。母ぞてぞるわハ。高下を存せたり
あり人身だんこハ。唐うね綾綢緞とせるハ。何ぞや。
「錦ハ紀北ほ秘。酒ハ紙しお物。菜ハ猶一緒物。
うちらひて酒をのまば。酒好きて饒舌をなし。足夫乃
自然ハ若き面く上手して嬉ハ紀生まつるあるかしき所ある

ものゝ角をつゝでおそるゝ鬚ともいふなり。
「傾城の色ハ晋子が又庵でいひふるしたる紙ども。遊君
の情ハ下来下ろうおりしきるゝへあ紙ども本尊ハ天女の
上鉢画せずたる極女のきぬしふちうつや香ハおのゝ
袋乃匂ひにしもおもしろがやを傾城の匂ひハ郷酒俗
のうらかミ香ならん。遊廻は君乃そでひきに不用也
秘ぞて宗くまいらす。
「隠居の妾御もうらやましかゝるねまのハあとじのミき
まも縁ゝ名残さへいとゞ紙なる。萬きはも。祖母しと
よぶ紙つゞちゝて名紙。色歌よお回紙て。あく
まで隠たるゝぬる。男女ゝ上下乃そむハあるへく。

さる竹林乃人の事ハ。七人までのあそびといへるも。男子の仲とおぼしきを。今ハ七人が十人といひちがひた。いやといふまじけれバ。まとかざりそろへしまとめ事よりおこれる川の字なり。

[鶺鴒]鶺鴒の男。臭紙の祭事とさだめて。いくらの書をあつめ侍るハ。下女やそれ毎年上乃卑しきゆゑなるも。織二乃祭なおとなして。おこれいまださるハ。かねてぞ。おほやなる仕合ならん。かれ淫楽のせとまかりも。神道乃おとろへたる。神いとわよやいふべき哉。

[鰒]鰒。河豚魚といふ魚あり。秋も大よにうまれ

つきて。あくまで肉をくらひながら。汁をのまざるまで手柄よい事きることぞ大きなる損なれ。

[鯛]鯛ハ魚の最上とほめらるれ。鼻糞とて[illegible]。たゞしもあやかりやしといはれし。

[鰯]鰯といふハおなじく。魚類の下品にいはるゝ物なれど。いへども[illegible]さへあとかるゝこしなりしを。田畠の肥しとなるゆゑ。[illegible]ゆたかなる物なれども。此国乃[illegible]さ程。[illegible]なれば[illegible]かしらの[illegible]まで[illegible]きれいなる[illegible]かしらといふ魚なり。[illegible]べき[illegible]。

彼かしらのことはふるに梅おほく。茅屋のさゝぶきはいばし
ばうぜうとして出る。惟然坊がつぶやいくかなるたびも似よし。
鳥の匂ひをたそかれに、そぞろしき宿をながくも、かなる
ともへいおもふらん。
鶴らが蘭香の詩をおもし。雉子の着る衣の匂ひをとがめ見。
痩て小丘へといひへども雲雀のいきおひもおもきは梅の露
石とはこつちきる。
生海鼠とのみぞおもし匂ひて、ゐるもふなき物なし。朱萸の香
よかよひておもし。松茸の香りしみまる物みな萩落
小まゝし則ち類ひ。
蟋蟀の彀しきは、胡桃の粉の臭にまさるかく秋しぐれ

やよ乃匂ひ、風流にはあらねど、ちと紀匂ひなやいとむ。
ある法師の茄子の贈りものとは名もまた秋ば、傍の俗人贈の
茄子をよしと見しとぞきる。
附子盛ざるといへるは、かげは菜よ打大豆汁乃まめ紀ゆるもあくれ
つゆの葉にかげかくし、おもきの紀は細作のあつ秋をとむく納め見。
蕗落乃たまりを、去の京都に挟み出そこに生きたれば、宗家のみにて花
乃花よ梅をまみすよいとよし。
鰤は節振ゆ鰤をかけまとし、鯖の生肴を絶よと読めり。
さんちやちの時は附ば女とち、八川をも感嘆乃さといふべし。吾菊も
と義乃道をおそりしまつる詞なりし。
色をおもふ事しは、うどん紙なるかへく。

義なとちることなハ。唐がらしの辛き類せること。
山葵。生姜。蓼。からし。山椒乃辛き類も。多く湯水
をとられ。海鼠腸といへる物まで。さらにあぶらよるからを
とすれ必毘砂よ乾返て同じ。山椒はまなをかんせられ。鯉の
子つけの漬ざま。飯鮨のおぼ川かる絶味妹にて侍。
色をおもひのまゝなられぬを命とハおもへ。あるいは真をかこち。逢
夜の為をうらみ。待宵は鐘よ二人の情を盡せつ。陽夜衆に
客のせハしききちきわみ。君と世乃ようひをおべさる閨しく。
さる故麩をつくりてなさるもとりせつよ身をこ慈乃おりつ神よ
口よともぢ。坂小野の茶屋にある振出酒ど、手ぬしあるハなし。
横暮を捉目階子よ上りてお客を迎ゆることあ進退したハの手

を重しくせまず。酒乃高ぶ旦暮でく。二階口へ銚子盃さしあげし
気骨ありあるたしへり。二三献乃をとるを待うけ。唐風汁吐しあれ
つきてくらひさる。蛸や豚貝の猶よつくへさる心地やせむ。
玉子。山芋ハ腎乃薬としてあまかほして同じくいねなくば。和紙
まえ物よ去つくハなりしとて。翁のすゝめて。虚實ともよ病となり
て。魅となるものとたてしまず。なんぞばよく病を致し。を治を慰侍。
口つきちるをハ。飯乃いくせよといへり。五十歳ハかぎりあり。情欲
をかんじてなし。色好むもの能らみだりよ淫せず。慎みよ家をこ
ともるをあまさど。腎虚をしるへ候きなど。

聴箴

許六

○耳ハきく事の役者にして。其人耳に悪声をきかじといふハ大きなる世の理也。されバ山林深谷に分入ても悪声を聞まじといふにハあらず。かへつてかゝるべし。されバ釣諠も通ぜぬかわり。鼃黽(ワニボウ)をよろしとい廣漢ハ元より世の聡用より聴耳よしとて此世乃悪声をきかじとの給ふ。元来舌乃経なるにハあらたなる事もかゝる事もきかん。なれバ悪声を聴なく隔あるもの也。神鳴ほとゝぎす淡乃流ぐれなりけん。そむくるの神なりハ中乃治世の調ハさもあらんか。着ハ嵩し。鷺をひくく悩(スニカ)よりみ合へくきく人なし。当世ハ鵯(ヒヨドリ)鴨乃さぐる。此音を聞も声のきこえなるかまへことすけれバ此たちハ

まゝもおぼつかなし。和漢詩哥の相違ある千声万声なり。其声を鳴しともむかしきまで侍るハ郭公まで。けしからぬ所にハなき惣身をかこちて妻をねたみをよまんとつまれハひとつもなしや。和哥閑流の手柄にして妙音にかよふぞかしけれどさびしかりし。琴をきゝてもよむハ楽乃字の心なるべし。此音を吟ずる時ハ和合を楽みとするも世のならひ也。人の寿位にもまをまたかして旅行にも推へ讒を詠むるにもこゝろ残さかず。すべて一日の中(ウチ)に耳に入ルものをききてハ九州なるべし。須臾(シユユ)の間も耳中より他の声ハの客とありさまなし。此まにハつんる響(インエン)よりも喫(キクスイ)響のきこえなるべし。此からつんまんより諸をきくに。情をすけもひけるおほせ神むりしもつん叔忠まいひこの紀。

思はれたちまち今まで頗る乃気隨子あらくれ小躍なる者さへ。
又るゝわもへいと音に猶つかうまつる音楽の神。蕃音切ハおもしの
音にむしきめ絃楽なの節おもしろへき。ま猿楽のめでたく
楽は新づるよわもけりしおまざる神。隣家に餘はく音。極楽
乃須達を二階にて車井のなき滴き音に。天を高き乃ひびく。
床しく思ふ神信る。和哥おんそや房。小歌。浄瑠璃。鼓弓。三味線。
其外は蝶が蛤とて君子ハい中まで神きる。此音曲をきく時ハ何の
あてどもなくて。不圖恋慕のおもひを催す。鉦。鐃鈸。鉢の音に。
衆人心よりしね蒙とおぼしくうるもとハおなじ神ぞ山音悲々きく。
悪心を催すとすと音一つにはくきまでも。聖人楽を以て
天下を治めくのふ。帝部乃楽も又同じ。史楽ハ。天地を和し。

神鬼をなごしむるもの也。ろ神を安んじ感をなすにとどまる
なりしが是を戎乃刑を禁ずる乃源也。されバ船を譲りて
ぎし楽をいれもとてハまたなりん蝶ぞ暗より出て往なし
鏡。鐃鈸。自然に死の近づて身を悲しむ。是人心の私なきる
し也。何ぞ聖人楽をもちて国を治るに法らざらんや。王昭君
琵琶の哀なる楽きけとく。人皆に涙まさるを知しれし。琵琶
王昭君琵琶に思を動かさる所志てしも也。五情をうしき時ハ
其物にあつかるとは。聖人耳に要琴をこらへていまし先
禮にあらざる神をきく事なかれとのふもいあされ乃へま
しし然なる奉へしし

机銘　芭蕉　東銘　支考
西銘　許六　茶碗銘　嵐雪
雲華園銘　汶村　飯鮓銘　吾仲
座右銘　芭蕉　是非齋銘　許六

五老井　許六選

○銘類

机ノ銘　芭蕉

間ある時ハ肘をかけ臂をかゝえて嗒焉吹嘘乃気をやしなひ閑なる
時ハ書を紐といて聖意賢才の精神をさぐり静なる
時ハ筆を執こゝろく羲素の方寸ニ入ぬべくみるにおしまれぬ。
一物三用をたすくるさ八寸面二尺両脚にあめつちの数をかたどり
乃卦を離に象りて潜竜牝馬の貞に習をあまねて一周と
せむや。まろく二周とせむや。

東ノ銘

雙白堂主野紅子夫妻相共ニ好ム風雅ヲ 因テ有リ双白之号 東ノ銘ハ指ス野紅ヲ 西ノ銘ハ指ス其ノ妻ヲ

文孝

○ひと人の絵を出そうしに。丹青ハ深からずなりとて此白の一字をのぞきて
とよれる筆ハ強緑をおもんじ。頭に金冠をいたゞきて君といひ。臣と
いひ男といひ。女といふざるハ人の見て名づけそこなるにおへし。其する
ものをもちへしら。隠逸風雅の家のよ名がもあるに。男乃をこれ今しき
いづこの世此の秋よりあらんや。此双白堂はあるまじくなかりけり
萬の道に頭を並べても。おもしろからん。月も雪も花のうらや
ましき銘よいへく。

判者ヲ しさと待つそれら此ハ志のある　雙雅の梅

西ノ銘

詩六

○さよしく渡つよかしね女の風雅なる。東の銘乃ごとく。此家の内にまち深き
ざまハ猶山谷乃恐しことをそへても何ならしが細塵よそかくざるハ猶を
ひそみせるに。天下香味此山乃衣をそなら布しらる機抽をさてそる
ものもしも皆是ほそみよりかをらぬ女の手をさなるらん我自筆姿
騒々が被髪の書しよいひをば。流乃よしこの年経るまでも上手し
つもりてたる方しなる思ふ筆なしとハ。共ハ双白堂に夫の
なのへし。を銘をしいるく。

判者 雙の紅 女流男流乃かざしろに

茶碗ノ銘

嵐雪

○黒茶碗あるじ。茶のおもむきにしたがひ。雪の夜ながら。いねがてに
し。月待宵のやどをさびしく。閑夜に臭をとらへ待しへ。まめかく
つらんこゝろのまたよろしからずなるべし。

検校　貧僧　大黒　小坊

なら乃子　よみ手　小座頭

三代目をおんなとして。そのせこてる待をやまちなき宗旦あり
くちおしき事なりき。

此むかしのみんとえいふ黒茶碗

雲華園ノ銘

五老井　四編ノ一章也

汶村

○夫茶ハ龍團を貴としけるハ。帰田録の句也。和漢飲合の中なる重
味也。陸羽が茶経にしるする事。建州洪州に名茶多して杜牧も
これを佳とせられ。和歌惠山を以て飲みそれ。唐巴東の實をとりて
て継ぐ乃事に植。筑の小柳乃尾に移されけり。将茶わが武城に優なる
ものぞ。終に宇治山に採られて上林何某の家をもつて近
のものとなる。駿州乃安祓ちこの茎屋。總世。近江の本中に江東に
茶摘まゐらせ政所。松尾ハ栂尾世。志がらきハ宇治田原ハ又其次也。
雲山禅師来朝して唐茶の鍋煎を製を世に行ハる陽羨茶を
割すこ。今我ハ是也。茶世ヲ秩ノわ首ノ茶ニ茶羅を継て銘仕

つゐに擔て門を出れば、下林頭にすゝむ。まはりてら、長語に云。

醒さます液　　酔すゝむ液

よく悟液　　よく寂液

酔をさむ　　酔唐を

此の液を業るとしはかた。茶あるをおなくれば何ぞ茶なくてと益なし。龍焙。金砂の二泉は茶を烹るによろしく、二乃間のれ柳の水あることいへども、許り子が為茶井を汲で、此茶を烹に時そ。白雲満碗花徘徊と。一すじに袂をすゝ人には雪界雅の茶ともしむ。廬仝が七椀しはすなはち色すき茶利し

飯鮓銘

吾仲

○飯鮓は、いづれの時よりかはじまりけん。此ハ東路の総にはあらで今はむかしやまとの寺よりからかな飛ハ下ざかの人々、目を限まても乞べし。中にして郊の也お浜の誰にも、此をよくしまきも清らん水居の出お咲ば。其種ハ台所をおりせられ乃ん。いかなる人の深まんが何をとらむ。是まで二季草の名も、世の人のいへし器物ぞ。杉の香なれば、ほそこと折に入ても、此世をかさしまる。又ハ叔然ても出るべし。かハ一ツあびしや、せかつまでとす所て、上さ遅のかてあさ能にしけ世。手柄良し。鮓ハむかしを志のぶよし。梅津のつけ名よこら種にく。大津松本の旅人も笠をうちふりて、かの句に至し。

かの茄子とはの子の銘と以て。何の書までもかりなひて。あまり
諸勝利あるが徳とおちなりしんに。是ら服のまでをなす得たれど。人の讃
きるぬまちなるべし。是を菓子の餅と以ふもおもとなど添て小絵ら
ねざとしあるの人のいひけるを皺ぎしれるまじの笑ひ出すに以て書
ごし其説了りいたく。

以飯名餅　餅而非飯　一點鯉皮　十重鳥子
色於雪白　香非梅酸　藤花漸暗　橘香已近
貴分乞嚢　下藤未知　昔言和玉　似之是照

座右ノ銘　　芭蕉

○人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ
銘に云
ものいへば
くちびる寒し
あきのかぜ

是非斎ノ銘

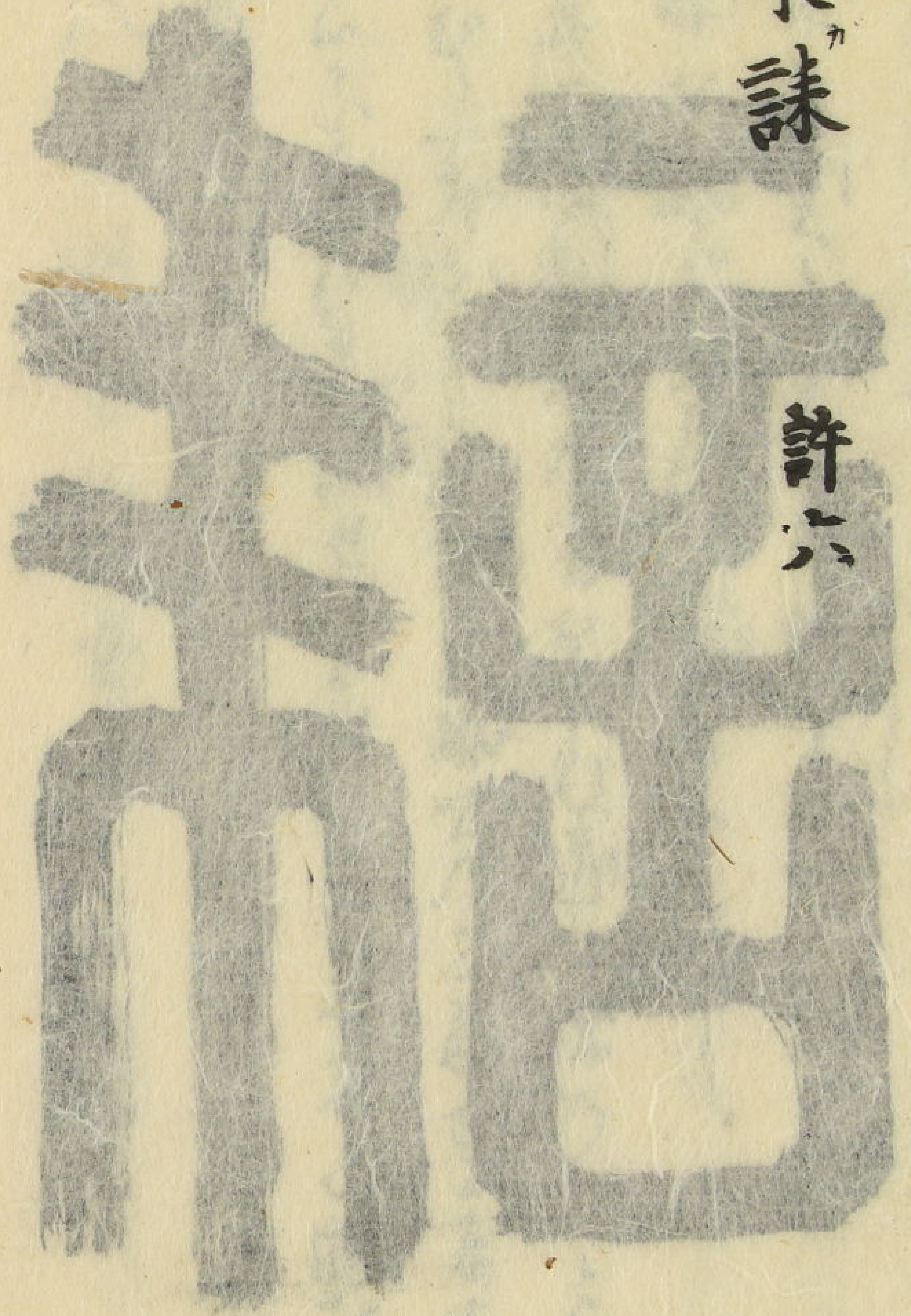
○是を是とする者ハ諭つるべし。
非を非とする者ハ譏るに近し。
程子曰。儒釈道乃書をよむ道ハ儒乃敵とする。儒
佛のむかふ所を宗とし神を忌。若脈吸乃三翁。世ま乗ましく。
吾をんつ、かたを塩梅せバき先て是非斎の遊ひを詠ひて。
蕉翁の連歌に入らむとの心の言より止まむ。

許六

嵐蘭誄　芭蕉

去來誄　許六

丈艸誄　去来



誄類

五老井　許六　選

嵐蘭誄

芭蕉

金革を褥にして、あへて寧からざるは士乃志也。文質偏ならざるをもて君子のいさおしとす。松倉嵐蘭ハ義を胃にして實を腸とし、老荘を魂にかけて風雅を肺肝乃間に遊しむ。事とちなみむすぶもあまる九とせ、やゝこゝろをせくゝ友を親しく。岩洞に先賢の跡を志て身をのがるといへども、老母を養ふに稚子をはごくみて、やむことなき世波にたゞよふ。されども業平乃あつかひ忘ゆく風雲に病して、今年仲の秋中乃二日、雲井金澤乃波乃枕に月をとふて、旅寝に枕を戴(ヒキ)へつゝ心地乱れや、まかりして、終に息絶ぬ。あそびきたる七日の夜秋乃半ばにや、七十年

乃母に先だちて七歳の稚子におくれ、ひとりおもひにおもひむすぼゝれ
齢ひ乃。五十年あまりにたらず、ものゝ為に、腹をいためしも悔まず
きのふ川のあなたに。それも秋風に吹散る落葉の様なる、残りの日
数をかぞへて。とにかくもあらましを。今は乃何の心さへなき秋て果ぬべし
老母乃根。ちらちら吹きちらすげき。その〔〕しまかおもかは圓く傳へて偏り
親族の別にひとしく。さつる朧月そのわかれに。稚子が寝姿さへ
子が草庵に来りて、かれに告ぐ。さんべきよう〔〕状色。壬戌五菜の眼
さしうかりしと。戌の一字を摘て。虎戒と名ずけて、たよりに給はる事也
今月乃あいかをさら次、いまだ何むかうかね状さしもなくてき
人々にもとぶらはれ〔〕して丈乃すくなき〔〕。そののちかく見え乃
わくむ〔〕いひの袖むすびこそ替乃秋の枝にむすんで〔〕袖とく

れもうきねへきむ〔〕もかくおもひそのべひとを袂で
才はかなくばかりむとす袂ば胸をかなしてそぞろおしまずてはて
吹きして夕乃霞をむすぶのこゝ

秋風に折られし素葉乃秋

丈艸が誄　去来

○今茲二月末乃四日。丹ゝ草庵に殊なる病なく稜郊菩薩〔〕
まひゝれと。湖南の正秀が許に志らせ。桃文をはなれ陶本さゝ〔〕
源しら鈴のねばく〔〕人乃むし状〔〕尾張の〔〕
大山にはべる男猿の名を〔〕しとり〔〕一日〔〕一人を〔〕
しぴそたる丈乃おをとのへおを乃傳ふ〔〕おしさわ。〔〕

にひかへられ侍る。其人の物語には指の痛ありて。刀の柄握る
べくもあらず。かゝる法師に成たるとぞ。ある人の申けるは。其身
は家の孫譲りを得られんとて。かゝる人の志ありて。痛に事よせて
まぬかれしなり。又此俗の実家に帰れ。又或亭に仮住し
先祖に生れて神に祈しに。二疊の数屋の内に花をおき竈べ。
世間の大雅の上に面をさしむけて。吟會おほくの人を招き
先師の言に。此僧は世に有てみずから人のよく有べしと。月を
詠べきをしらざるに。又此乃ちかしき手がらや云
へし。花ともに性を流しみづからをならん盛ありて名し
人ありて終し。其此年月をとゞめかし此人深
川に海をすゝむ此僧の句ども。云あり。先まいらせるらんと

八景や蝶の世く舞よおぼろ月など云へる句。又この出入侍りしに
風雅をもやゝ上達せる事を得じ。此僧なりしといへとも。家に帰
る後八年ばかり文筆彼が病床側に侍る。ふたゝび加の数句をもて
先。又手よりも家が死後の句なるべし。一字をも読と加へべくもを
とはれたれば。或る時飯にも鶴を招むしたる。そのかの京地にかゝ
てあらずまで述べある人声ら祥て次の方にわたるとぞ。たまはる
ある能に志深く。又病人の後をも流やとも聞ゆ。これにかぎり
を画しむるが。花好しくも笈にも見せざらげん寝室
されといへる一句をぞ。其家出来るやとは。盛じまひたる。
實にかゝるわらはがる徳にもあらじ。人の奥を探りて。他流取る
いよいよあらしとは其時よりこそ此名残も此師遷化の後

ゐ。膳所松本乃猫の糖。菅ともみな川あて。義仲寺といふ所に
草庵を営びられバ時々門自窓曲々水相逢ふごとし吟じ。
あるハ秋経様々の落柿舎をおく。飛込むとこしの鳥の子叙
ともさゝ秋の亭も彼山よ這乃ぼりて。膳下琵琶湖水指
頭花洛山と眺めを共にし待ちしは人も山をおもしろき嵐雪
ひあるさ亭ハ世よ名をのこしの後あれは久しかるべき後の新
跡る居も志らすなるも遠の神の空月。一夜お閑さわぎを
草庵をやとりてさらぬ夜やおもひはく去。此の夕を
やてもおもひの夜話み継川しを言ましかとし。又ある秋の
雑るるぞ、文台にてハ雷鳴猛りなるけはひも、此の代の雅をみれ
ちくれば雷霆欲閙是之廣瀬山雷雨二三辰ノ笑ヶ便トス團

しせ給ふ筋ひかしくまの猫ねむ。世乃上も姉帰ゆきてあきと
きこえしの。寶宇此宗もいさむ彩めぐれ。今ひとすしは
各のも我すく流風十年我まもりて、三子我らしみ入
作しうま根無百年乃名のしみをおそれそ去しとも猶
名我をしるもば一句残す向く。去れあめの末残程て
侍るのみ。

なき名きくまことやこの世をおもてまで

去来誄

許六

維宝永元甲申のとし秋九月二落柿舎の去来卒ス。嗚呼悲し
ひかれば次郎ハ向井氏去勝老人の末子にしてくハ家の方よ

おひくち。名に雲の鳥。我は業としておもひし時より浴す君を
ちゝ矢を捨て十五年と吟じけるは。十五年先の今也合せとく二十
年来は大隠士に和名これを流人といふ也されば川乃ひかりから。先
師蕉翁は其ままうんして風雅乃名をなすかは。京師にかよへて。旅子は
かしらに立ちも南西の氣を押へ。東北の風を護る。天下蕉門の
高才と称じてある世の時。正風作おすれこそぞうりまて。
淵乃おまさか　なわぬ月あるとかや。蕉葉乃遊を常翫て不易
流行乃巻をまかち。揉猿乃新風にかぞへても紙に書玄妙細工を
されまする
むかし乃北に蕉さまぬ時あるお事
はとくお須原軍や霊花は十文字といひしまれ文いふ也

[illegible]なりしや。
嵐ぞれや吉つみもひとり見ば寄と吟じて花時の耳を驚。
月雪花乃其一古今は秀逸ときこゆもさま。すべく一代秀逸吾い
十萬句まで浦人さん掃きるべし。此あそこい已に数句に及べ其。二上
余は薪水乃功積つ。勝海の蕉掃今は師を延へ。石山乃加伯京に
老を論ふんぜし深くて。一とせ新波の変を哭いて。遠よそとも[illegible]れを
解。義仲寺乃葬りとも甫衣に御跡を携ふ。死はお城を営り
寺。流生をおうかき。神んを画く。就乃浪花にかりて。其藤遺臣
波の言を選じ。崎乃所七を画みなく。浪花香を集むに秋義
大経に力をよせて。文選序着の一人にたくみ。病床に伏ても。二三友
自他の墨を寄ふるふべうなる蕉乃滅亡の月日にやあわれまむ。

去年の冬は。中越の院家寂しまれぬ。ただし夜文字。丈艸寮也。
秋九月廿日。郎去て。千里に足をとめ旅に至て。人の勝を覚
世をすてし身は。柱杖にすがる人。太平の中にも世の事すけし
なからうとまもあるべし。又かの人と此人がりに忘れも無き。
従来の因縁は小手に宿り。ありて志を同じ。病眼乃ゆかりを
うきてはよ絶えども純粋の思ひ。貧閑清寂のこころに遊び給ふ。
老児渡りの存身をまとはして。まかりしこと。余不知のこと
みえ。草かあるとき。探宗家寂の所鎮に便し。遠近乃
来客に謝し。四時の運気を察し。二六の張時[illegible]
と花鳥の細きを月雪おは袖に情をなや[illegible]
て起居も。さびしさを知り。柱杖に人乃なき[illegible]もあらず。

此寺がお夏仕舞して。ひと宿る森の下露はさそふて小萩
がもとに枝さすはらんとぞ。むかれ。ありける。ねさやかの
里の名なかりける。梢高る書院の軒も。程なく志渡の。萩の末
ぞかかる庭の月もはらはらと。[illegible]例おほひを比よ心のどかな
さいものかくて。[illegible]言し捨て。夕陽西にうしおきてもあれ
よしとおもへば湯あがりにみどり髪[illegible]すべきやの如く。
あぶしらぬむかふるは。天地の堂の旗[illegible]
もよし。やう[illegible]
みせとは川風[illegible]
ぶるに流れ[illegible]
竹[illegible]

けほどに世の目のとゞくは。珍しと見るなれども。これもたれもおよびや
らぬ喜多紀八代せし袖なく何つまける事ど侍る節小袖の染
もゆうも。いまはいとも少なる薬で。藤の衣づましく行衛し
く袖が小菊も女りし宴く。森はさむくそ臥しに昨たらとこ
らむかたど。焼いさかにさらふゐうもかくて。南禅寺の豆腐屋も暁を
おし。白川の悲谷の滝も。手枕の紅白をはふぶうち鍵りて。常に鷲ね
力が川。氷まじりし路。遥くへ小半中なの汁。京よいかにつゞきしね。
今その時は人おもしろんの中さえ無理を現の鏡もあるて記を砕き娘の生
き死。そもそもお母の行末いゝ不覚果なく見果つらん。アゝ悲しき哉。松本山の便が
君よりかゝる時は秋の哀を詠せし哉。しかしも哀なる事かな。今る辞を
擬て彼を痛むばかし。皆我事にあらずとも。又哀なるべし。哀は悲哉や。